

中南米におけるカンキツグリーニング病の真の脅威

[FreshFruitPortal](#) 2025年12月8日

否認が数百万ドルの損失を招く時：中南米地域の柑橘類に対するカンキツグリーニング病の真の脅威

個人的な関心とおそらく職業的な習慣により、筆者はもはや柑橘類から目を離すことができない。柑橘類の果樹園の健全性は、地域経済に関していかなる財務報告書よりも多くを語り、それは公共政策、投資、水管理、及び戦略的ビジョンに関わる無言の指標である。柑橘類に影響を与える様々な問題の中には、共有された居心地の悪い沈黙に隠れた危険が潜んでいる。中南米地域の一部の業界の幹部会では、それはまるで無視すれば遠ざけられるものであるかのように、たまに触れられる以外はほとんど言及されない。その脅威とは、「カンキツグリーニング病」として世界的に知られるHLBである。

この問題の大きさを理解するためには、かつて1級品の柑橘類の代名詞であった地域で何が起きたかを見るとよい。米国フロリダ州が到達した数字は動かし難いと思われた - 最盛期にはオレンジ2億4千万箱とグレープフルーツ5千万箱以上を生産していた。その生産力からトロピカーナやフロリダズナチュラルといった象徴的ブランドが生まれ、この産業は雇用と輸出を生み出ただけでなく、州のアイデンティティをも代表していた。しかしそのアイデンティティは今や崩壊している。

この病害は、必要な対応が取られないままフロリダ州に到来した。生産量はオレンジわずか1,100万箱、グレープフルーツ120万箱にまで急落した。それは危機ではなく、崩壊である。そして打撃は続いている。この地域で長年にわたり柑橘類を生産してきたアリコ社は、2025年初頭、柑橘類事業を放棄し不動産事業に集中するという、すべての農業投資家を震撼させる発表を行った。被害は生産と経済の面だけでなく文化面でも発生した。今日に至るまで、その悪化を逆転させる技術は存在しない。

南の諸国の偽りの安心感

中南米地域は既にHLBと共に生きている。ブラジル、メキシコ、コロンビア、さらにアルゼンチンの一部地域が打撃を受けている。ペルーは発生を検知し、極めて厳格な対応によって根絶した。チリは、今のところ媒介昆虫がいない。地中海性の気候条件がHLBの拡大をある程度遅らせる可能性があるため、影響はフロリダ州ほど壊滅的ではないだろうという議論が頻繁に聞かれる。それが事実であったとしても、既に利益率が低い産業が20%の収量減を吸収できるだろうか。10%減であっても収益性を構造的に変える可能性がある。

問題の大きさを測るには、必要な投資の水準を見ればよい。2025年だけで、フロリダ州は柑橘類研究・圃場試験基金に1億ドル以上を割り当て、柑橘類健全化プログラムは品種開発、病原菌除去、抵抗性品種の苗木増殖のために850万ドルを受け取った。カリフォルニア州の予防システムは年間最大4千万ドルを要し、州は研究に約700万ドルを投資している。連邦レベルでは米国農務省がHLBプロジェクトに約2,300万ドルの拠出を約束した。今日の中南米地域で、このような対応を維持する資金を工面できる国は存在しない。

責任は国家に限定されない。中南米地域の柑橘類産業は、監視、トレーサビリティ、迅速な対応のための集団的な仕組みを必要としている。それは規制遵守の問題ではなく、数カ月と言わず数日以内に行動できるシステムの構築に関わるものである。

HLBから得られた教訓

2025年の国際柑橘類苗木会議 (ISCN) において、2人の米国人専門家が、HLBがいかにして家族、共同体、そして何世代もかけて築かれた生活様式を破壊したかについて、感情を込めて語った。それは報告や技術的プレゼンテーションではなく、喪失の物語であった。フロリダ州が崩壊したのは技術不足によるものではなく、過信によるものである。中南米地域にはまだその結果を回避する時間が残されているが、その窓はいつまでも開いているわけではない。兆候を無視すれば、この地域は数十年かけて築いたものが目に見えない微生物によって数年で破壊されたことに、後から首をかしげることになるだろう。HLBは単なる生物学的脅威ではない。それはガバナンス、リーダーシップ、及び長期的ビジョンへの評価である。今行動することは成功を保証しないが、行動しないことは失敗を保証する。

執筆者: ジョルジョ・ペイラーノ・フィゲロア

(翻訳は特定の見解を支持するものではありません。)